



『全ては子供たちのために』

杉小だより

令和4年 3月16日発行 第17号 文責：校長

塩竈市立学校の取組
「挨拶」「くつならべ」
「美しい言葉」
杉小プラスワン
「きれいな黒板」

しおがほ「ふれあい」運動

ふだんから「早ね・早おき・朝ごはん」

みんなの時間を決めよう「テレビやゲーム」

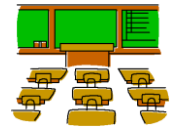
あちこく語り合おう「夢タイム」

いっしょに取り組む「体力づくり」

「東日本大震災追悼行事」より 本校での震災体験から 校長 秋山 治美

3月11日（金）の5校時に、全校で「東日本大震災追悼行事」を行いました。新型コロナウイルスの影響で残念ながら放送での実施となりました。式において、当時も本校に勤務していた曾根教諭に、体験を話してもらいました。私は話を聞きながら、当時の子供たちの恐怖でいっぱいの様子が目の前に浮かんでくるような感覚になり、涙が止まりませんでした。そして、当時「今、ここで同じことが起きないとも限らない」と、子供たちの命を預かる重さを痛感しました。

震災から11年が経過し、震災を体験した子供たち、記憶の残っている子供たちは、ほとんど在籍していないこととなります。しかし、どの子もこの話に真剣に耳を傾けていました。自他の命を大切にすること、そして、命を守る行動をとることを忘れないでほしいと思います。



みなさんこんにちは。2年1組の担任の曾根です。震災が起きた年から杉の入小学校にいたので、その時の経験を全校のみなさんにお話しさせてもらうことになりました。少しの時間ですが、東日本大震災の当日、みなさんが通う杉の入小学校でどんなことが起きたのか。また、杉小で震災を経験した私からみなさんに伝えたいことをお話したいと思います。

11年前の3月11日は、今日と同じ金曜日でした。その年、私は5年生の担任をしていたので、この校舎の4階の教室にいました。次の週に卒業式をする予定であった6年生は卒業式練習をしていましたし、その他の学年も今のクラスとのお別れを意識し、お楽しみ会の準備や学習のまとめをしていました。日中の気温は今日のように温かく、ほとんどの児童が教室内ではジャンパーを着ないで生活をしていました。

6時間目が始まったばかりの2時46分。突然の大きな揺れを感じました。揺れが始まるとすぐに、校舎内の電気が消えました。教室の天井からぶら下がっていた電気が大きく揺れ、その上に溜まっていた埃が教室に広がります。子供たちは避難訓練の時と同じように机の中に入りますが、教室の床も強く激しく揺れていたため、机の足を押さえるのに必死です。クラスの児童が避難できるようにと、教室のドアを開けに行くと、廊下においてある本棚は廊下の真ん中まで移動し、教室のドアは倒れています。そして、階段の近くにある防火シャッターが閉じ始めました。あまりの揺れの大きさや長さ、机の下から何人かの泣き声が聞こえてきました。「大丈夫だよ。すぐに収まるからね。」と声を掛けたものの、10分近く続いた揺れは、大人にとっても不安な気持ちになったことを今でも覚えています。

少し揺れが収まったとき、停電でも使える防災用の放送を使って「校庭へ避難しなさい。」というアナウンスが入りました。その当時、学校の安全担当だった先生が、職員室へ駆け付けて放送をしてくれました。隣の教室の先生と話をする余裕はなかったので、放送が入ったおかげで安心することができました。

いつもの避難訓練ならば、冷静に避難できるはずですが、泣いている子供たちに声を掛けながら、また、校舎が崩れてしまったらどうしようという不安を持ちながらの避難は、いつも通りの速やかなものにはなりません。早く避難しなければならぬという焦りから、多くの学年が中央階段に集まってしまったのです。狭い空間にたくさんの人が集まってしまったことによって、移動の動きが遅くなってしまいました。そして、階

段を歩いている途中にも地震が起こり、何度も階段に座りながらの移動になりました。普段でも階段を降りるのがゆっくりな低学年にとっては、揺れている間に階段を歩くことはとてもこわかったらうなあとと思います。

時間が掛かりながらも校庭に出ると、地面が割れているところがあったり、コンクリートが飛び出していたりと、気を付けて移動する必要がありました。何分か経って、スマイルロードの近くに全校児童が集まりましたが、低学年の多くは泣いていたのを覚えています。防災無線が津波警報を伝え、並んでいる列からは泣き声が聞こえ、朝会の時のような静かな整列とはいきません。職員室にいる先生たちも急いで外に出てきたので、声を大きくする道具がありませんでした。当時の校長先生が「静かにして話を聞きなさい」と叫び、校庭中が静まり返りました。

校庭に迎えに来た保護者に児童の受け渡しが始まりました。停電中ですから、学校からメールを送れるわけがありません。我が子の安全を心配して、保護者が学校に駆け付けてきたのです。海の近くは津波警報のために通行止めになり、そのほかの道はとても渋滞していたので、仕事をしている保護者の方は、簡単に学校に来ることができません。時間が経つにつれて、あんなに温かさを感じる一日だったのに、曇りになり、雪が降り出しました。教室で過ごしていた格好のまま避難した子供たちは、震えながら保護者の迎えを待ちました。

夕方5時を過ぎると、停電で電気が点かず外は暗くなり、寒さも耐えられなくなってきました。保護者の迎えが来ていない児童と先生たちは、寒さを凌ぐために、安全が確認されていた体育館へ移動しました。すると、学校のまわりの工場や地域住民の方が、避難してきていました。1日目の夜は、1500人を超える人が杉小の体育館で過ごしました。遠くで働く保護者の方は、夜になっても学校に迎えに来ることができないこともありました。そのため、家に帰ることができず、体育館で寝た児童もいました。その日から、杉の入小学校の体育館は3月31日まで避難所として地域の方のために使われました。その年の卒業式は、体育館が避難所となっていたので、4階のホールを使って行われました。

先生たちも避難所の手伝いのために、交替で学校に泊まりました。避難所でお手伝いしたことは、断水で水が出なくなっていたので、毎朝、トイレを流すための水をプールからバケツリレーをして運びました。また、避難している方への食事を配ったり、一緒にラジオ体操をしたりしました。灯油が届けば灯油倉庫に走り、給水車が付けば、飲み水を確保するためにポリタンクを持って並びました。自宅に帰れば0歳の娘が待っていましたが、避難所にいる方が少しでも安心できるように、笑顔になってもらえるように、自分ができるとはやりたいたいと思って何度も避難所に行きました。

震災から11年がたった今。当たり前のように、家でも学校でも、あたたかいごはんを食べることができず。体育館で体育をしたり、卒業式に向けての練習をしたりすることができます。家族が待つ家に帰ることができます。水も出ない、電気もつかない、家族に会えない、震災後の生活からすると、当たり前の毎日はとても幸せなことです。

生まれる前で震災を経験していないみなさんに、生まれてはいたけれど記憶がないみなさんに、当時の生活を想像することは難しいことだろうと思います。ですから、あなたの周りにいる大人に、震災の日はどこで何をしていたのかを質問してみてください。あなたの身近な人から話を聞くこと、それが東日本大震災から学ぶことになると思います。そして、今日はいつも支えてくれている人に「ありがとう」を伝える日にしてほしいと思います。クラスのみんに、担任の先生に、そして、家族に。あなたを大切に思ってくれる人への感謝の気持ちを伝える日になるとうれいなあとと思います。今の生活が当たり前ではないからこそ、笑顔で過ごせる毎日が幸せであることを忘れないでください。少しのお話とっておきながら、長くなってしまいました。最後まで聞いてくれてありがとうございました。